

戦後七十周年記念誌

英霊と歩んだ道

―後世に語り継ぎたいこと―

一般財団法人 奈良県遺族会

序 文

終戦七十周年を迎えた今日、先の大戦の記憶が風化し、国民は戦争の悲惨さ、平和の尊さを忘れつつあり、また、世界各地では未だ紛争が絶えず罪のない多くの尊い生命が失われています。

二十一世紀を生きる私たち戦没者遺族は、二度と戦争をしてはならない。私たちのような遺族を出してはならない」という原点を決して忘れることなく、世界の恒久平和の実現に向けてこれからもたゆまぬ努力を続けていかなくてはならないと思います。

この度は、平和の礎とられた英霊の「心」を後世に正しく伝えようと念ずると共に、残された遺族が英霊と歩んだ数々の辛酸の長い道程を手記にして、英霊が私達遺族にとつてもいかに「心」の支えであったかを語り継ぎたく今回の発刊となりました。

終戦後七十年、我国の平和と繁栄は二五〇万英霊の尊い犠牲のうえに築かれていることを想起すると共に、我国の存立のため身をもって難局に殉じられた雄志に対し、敬意と感謝の誠を尽くすことは国及び国民として当然の責務であろうと思われれます。

雄々しく戦地に赴いた英霊の脳裏には、肉親を幸せにしてやりたい気持ちと同時に国を思う激しい使命感、加えてそれを支える「信じられる社会」があつたに違いありません。それ故に英霊のかけがえない生命の重さを銘記し、その意志に答えることは現在に生きるすべての世代の重大な責任と思われれます。

先の大戦は我国、存亡の危機であり激しい戦いでありました。純粹な祖国愛に燃える多くの兵士は、それぞれの戦域で敵手の矢玉を受けつつ身を挺し、昼なお暗い密林で餓死、疾病にて草むす屍となり、また大空に浮かぶ積乱雲を血で染めて玉と砕け、或いは南海の海原を紅い血潮で彩る水漬く屍となり激戦の末、力尽き命果てられました。痛恨の極であります。息絶える瞬間まで何を考え、何かを語りたかったことでしょう。さぞかしなつかしい肉親の面影を求めて無念の涙を流し、一人淋しくこの世を去って逝かれたことを思えば、遺族として断腸の思いであります。

しかし、その死が正に大和心を極めつくしたものであり、勇断にも国家民族の為に前途有能の身を犠牲にされたことは、誠に尊敢なことでありましょう。

七十年の歳月が流れ、世相もすっかり変遷し、平和国家として経済に、文化に、目覚しい発展を遂げてまいりましたが、国の礎となられた英霊を忘却の彼方へ押し流す様なことにしてはならないことであり、我国の興亡の歴史は簡単に忘れ去ってはならないものであります。当時、残された子供たちは幼少にて物心もつかず、もみじの様な手を振って父を戦場に送り、また父の顔も知らない人も多く、父の戦死の意義すら理解出来なかったかと思われます。その者たちが中心となって編集委員となり、今回の事業に取り組んでまいりました。我国の明日の為に過去を大切に考えないものには未来はないと提起し、英霊との歩んだ道も時の流れと共に消え去っていくことを惜しみ、英霊と交わした「声無き声」との強い絆を手記として広く集録し、戦争がもたらした愚かさや悟り、平和への願いをこめて終戦後七十周年の鎮魂の証とするところであります。

ここに、この度の編集にあたりご寄稿下さいました方、及びご支援ご協力を賜りました方々に深甚より厚くお礼を申し上げます。最後にご英霊に対し心から哀悼の意を表しますとともに、二度と戦争を起こすことの無きことを祈念申し上げましてご挨拶といたします。

平成二十七年八月吉日

奈良県遺族会編集 戦後七十周年記念誌

「英霊と歩んだ道」―後世に語り継ぎたいこと―

一般財団法人奈良県遺族会
戦後七十周年記念誌編集委員会



発刊のことば

一般財団法人奈良県遺族会会長
記念誌編集委員長

中井靖教

本会事業として取り組んでまいりました終戦七十周年記念誌「英霊と歩んだ道」―後世に語り継ぎたいこと―が関係各位のお蔭をもちましてここに発刊の運びとなり、その喜びに感無量でございます。

私達遺族の運命を大きく揺るがした先の大戦が終結してから七十年の歳月が過ぎ去りました。

焦土の中から立ち上がった我国は幾多の困難を乗り越え、目覚ましい発展と繁栄を遂げてまいりました。

その陰には、祖国日本のために尊い命を捧げられましたご英霊の犠牲のうえに築かれていることを決して忘れることは出来ません。その偉業は年月とともに風化しつつありますが、永遠に正しく伝えていかなくてはなりません。

残された私達遺族も歩んできた道は長くて苦しい歳月ではありましたが、肉親としてご英霊の国を思う崇高な大和魂を誇りとして、深い悲しみの中にも互いに助け合い励まし合いながら生き抜いてまいりました。

私達は戦没された肉親の魂との継がりのなかに人間の心の大切さを学んできた今日「魂なき繁栄」といわれる我国の精神的退廃に対し、純粋な日本人の心を堅持し祖国の安泰と安寧のために、我が身をもって戦域に散華されたご英霊の貴重な心に答えよう」と努めているところであります。

私達はこのことを次代を担う若い世代に語り継ぐ責務があるとの思いで、戦後七十年の回想録としてご遺族から巾広くご英霊との思い出、残された遺族の苦渋の心境、積年の戦没地墓参等、後世に伝えたいことをご寄稿いただき鎮魂の証として集録し発刊することといたしました。

戦争がもたらした愚かさを悟り、恒久平和を願う我国の未来に「平和の礎」となられたご英霊の遺志を生かしていきたく今回の編集内容となりました。

この度の編集につきましては最善の努力を傾注してまいりましたが、ご期待に添えなかったところはお詫び申し上げます。なお、本事業に寄せられました多くの方々のご協力に対し、衷心より厚くお礼を申し上げます。

終りに、ご英霊のご冥福と関係各位の今後一層のご多幸を祈念申し上げます、ご挨拶いたします。



発刊によせて

奈良県知事

荒井正吾

このたび、終戦七十周年記念誌「英霊と歩んだ道」が発刊されるにあたりまして、一言ごあいさつを申し上げます。

戦後七十年という大きな節目を迎え、今日の豊かな生活を思うとき、この平和と繁栄が戦没者ご尊霊の尊い献身と犠牲の上に成り立っているということを改めて痛感いたします。苛烈を極めた戦火の中で、祖国の安泰とご家族の幸福を願いつつ、あるいは望郷の念を抱きつつ亡くなられたご尊霊に思いを馳せますと、今なお痛恨の念が胸に迫ってまいります。

ご遺族の皆様方は、最愛の肉親を戦争で失われ、深い悲しみの中、過酷な現実を乗り越え、たゆみないご努力により生き抜いてこられました。終戦からの復興と発展に多大な貢献を果たしてこられたご遺族の皆様がどのように生きてこられたか、その痛ましい戦争体験とご苦勞を、風化させることなく後世に伝えていくことは、大変意義深いものであります。次代を担う若い世代が平和の大切さを学び取り、わが国の将来のあるべき姿を見きわめるうえで、この記念誌は重要であり、その一翼を担うものであると確信しております。

県におきましても、今後とも戦争体験を語り継ぎ、平和の維持に努めるとともに、「地域の自立を図り、くらしやすい奈良を創る」ことを県政の目標とし、県民の皆様のご意見やご提案に十分に耳を傾け、皆様と力を合わせて奈良のより良き未来を築いてまいる所存です。最後になりましたが、戦没者ご尊霊の慰霊とご遺族の福祉増進に大きく寄与されてきた奈良県遺族会のご功績と、本誌の発刊にあたりまして編集に携われた皆様に深く敬意を表します。

また、戦没者のみ霊がとこしえに安らかでありますよう、そして、ご遺族皆様方がご多幸で今後更にご繁栄なさいますように衷心よりお祈り申し上げます。



祝 辞

一般財団法人日本遺族会会長
参議院議員

水 落 敏 栄

このたび戦後七十周年記念誌「英霊と歩んだ道」の発刊にあたり、一言ご祝辞申し上げます。

戦後七十年、言葉にすれば簡単ですが、この七十年の遺族の道のりは、想像を絶する苦難の連続でありました。一家の大黒柱を失った家族に追い打ちをかけるような恩給・公務扶助料の停止。そして何より遺族を苦しめたのは、世間の目でした。

かつて軍神・英霊と称えられた戦没者は、占領下の思想統制により戦争犯罪者というレッテルを貼られました。かけがえのない息子を、最愛の夫を父親を、悲しみを抑えお国の為にと戦地に送り出した遺族にとって、これ以上の屈辱はありませんでした。その日の生活に追われる遺族が、働く手を止めてまで遺族会を結成したそもその動機は、戦没者の名誉回復でした。

厳しい環境下で、遺族は手を取り合い、扶け合い、その輪は次第に大きく広がり、その後の英霊顕彰、処遇改善運動へと発展し、現在の遺族会組織が結成されました。

戦中、国土は焼け野原となり、飢え、貧困、何重もの苦しみを国民皆が受け、平和と繁栄を心底から求め、必死に働いた結果、我が国は平和国家として歩み、目覚ましい発展を遂げました。当時は遺族のみならず、国民皆の心に辛い戦争の記憶が鮮明にあり、国の礎に尊い犠牲があつたことを胸に留めていた背景があります。

あれから七十年、戦後生まれが国民の八割を超え、戦争は遠い歴史と風化されつつあります。一方で、世界各地ではいまだ紛争が絶えず、悲しみは繰り返されております。故に私たち遺族が、戦争の悲惨さ、平和の尊さを「平和の語り部」として後世に語り継ぐ社会的責務があります。

まさに本書は、戦後の遺族の歩みと共に戦争の愚かさや平和の大切さを深く考えさせる一冊になっております。企画・編纂にご尽力いただきました関係各位に衷心より敬意を表します。そして老若男女、多くの方々が本書を手に取られ、平和を語り継ぐ大きな一歩になりますことを祈念いたします。



祝 辞

華嚴宗管長・東大寺別当

筒 井 寛 昭

大仏殿の東方、少し小高い丘の上に、奈良時代に造られた国宝の大鐘を吊るした鐘樓の隣に「念仏堂」というお堂があります。鎌倉時代のどっしりとした大きなお地藏様をご本尊とするお堂です。このお堂の後方には、「護国英霊殿」と呼ぶ納骨堂が有って、先の大戦でお亡くなりになった県内出身の戦没者約三万柱をお祀りしております。

昭和十二年に始まった日中戦争以来、戦が長引くにしたがって、県内出身者からも戦死者が出はじめ、漸く増えゆくご遺骨の収容に困っておられました。しかし、特定の宗派のお寺ですと、戦没者の家の宗派と違って不都合が生じるということで、八宗兼学を旨とし宗派に垣根の無い、東大寺が一番良いということとなり、お引き受けることになったと聞いております。国のために亡くなった人々を弔うには、国の安寧を願って建立せられた大仏さまの御許近くが良いというお考えもあったのでしよう。

爾来、東大寺では毎年八月十一日に、この念仏堂で一山僧侶の出仕により英霊盂蘭盆会の法要を営み、御霊の安らかな眠りと、四海の平穏を祈修してまいりました。

そして毎年この法要にあたり、敗戦の混乱から立ち上がり、著しい経済成長を遂げ、今の私どもが在ることは、かつて国のために尊い命を捧げられた多くの方々が居られたお蔭であるとの思いを致します。

現在の繁栄の中で、ややもすれば私たちは、過去の物事とは無縁に暮らしているように錯覚します。しかし、知らず知らずのうちにですが、過去から伝えられた実に多くの物、事に支えられて暮らしています。まして近い時代の人や出来事が、現代の私どものあり様を大きく左右していることは言うまでもありません。

ただ七十年という歳月が、戦争という悲惨な災禍の記憶を、遠いものにしていくことは否めません。あの時代を経験された方々が年々少なくなり、その事を伝える人々がおられなくなった時に、それは単に歴史の情報の一コマでしかなく、現在と切り離されたものになりかねません。

先人の尊い犠牲の上にある、この平和を二度と失うことがないよう、私たちはこの記憶を語り継いでいかなければなりません。苦い反省をよく咀嚼することなしに、豊かな時代を望むことはできません。

戦後七十年の節目にあたり、より一層、平和を深く思い、祈念いたします。



記念誌御発刊によせて

奈良県護国神社 宮司

宮 田 康 弘

奈良県遺族会におかれましては、終戦七十周年の節目の年の今年、慰霊の心、英霊顕彰の志を後世に伝えんと記念誌「英霊と歩んだ道―後世に語り継ぎたいこと―」を発刊されます事をお喜び申し上げ、また御趣旨に深く敬意を表します。

県内より、広く御遺族が英霊への想いを綴られ、後世に託されることを何よりも喜ばれたのは、英霊であるとは拝察いたします。年月の経過とともに、戦争体験、英霊祭祀の風化さえ危惧されております。しかし、私たちは今一度原点に立ちかえる必要があります。郷土三万柱の御霊は何のために、誰のために一身をささげられたのか、ということですが、それは次の世代にまたその次の世代に、身を以て示され、託されたのではないのでしょうか。守るべきもの、必ず伝えねばならないことです。

天翔くる御霊となられ、懐かしい祖国、故郷へ帰ってこられました。戦後七十年の現在、英霊はどのような思いで祖国日本をご覧になっているのでしょうか。親が子を殺め、子が親を殺める、毎日のように目を覆うような悲惨な出来事が報じられています。自分さえよければ、の風潮が身についてしまっているように見えます。民族の劣化とまで評されています。しかし、あの東日本大震災の時、世界は驚きました。誇り高く、凜とした日本。日本の精神の芯は健在でした。

日本の精神、心はまず英霊の心を知ることです。御遺族の皆さんは誰よりもこれを理解されておられます。だからこそ七十年間、我が国の制度がいかに変わろうとも、靖国神社、護国神社の祭祀を守ってこられたのです。

確かに当社もご参拝の方は往時に比べれば減っておりますが、お正月、終戦記念日などは、たくさんの方が深い祈りを捧げております。この人たちが御遺族とともに次の時代の祭祀をきつと支えてくれるはずです。

この記念誌によって、御遺族の言葉を通じ、英霊の心に触れることができるはずですが、御遺族のみならず、多くの方々、特に若い世代の皆さんに、折に触れ、ひもといていただくことを期待しております。英霊との約束を果たすために。日本を取り戻すために。



戦時中の軍事援護に就いて

一般財団法人 奈良至誠会館理事長

嶋 田 大 典

私共の奈良至誠会館は戦時中の昭和十八年四月十四日、帝國在郷軍人会奈良支部軍人会館として創立されましたが、昭和二十年八月の終戦で同年九月二十二日に財団法人奈良至誠会館として発足し、七十周年を迎え本年十月頃には記念事業を計画して居ります。当会館の事業目的は、(一)戦争犠牲者並びにその遺族の援助、(二)戦没者の慰霊並びに護国神社の祭祀に協力する事項を主要目的として居ります。戦時中からご遺族の一助になればと、県が企画実施した軍事援護の一部を掲載致します。皆様のお目に止まれば幸いです。以下御楯女子学院に就いて申し上げます。

紀元二千六百年（昭和十五年）の記念事業として軍事援護推進の為奈良県下に、

第一御楯女子学院（奈良市）学院長 嶋田常次郎

第二御楯女子学院（大宇陀町）学院長 山辺誠一氏

第三御楯女子学院（御所市）学院長 中川義雄氏

が設立され、終戦に到る（昭和二十年八月）まで約五年間、県下三ヶ所で軍人御遺族の子女に、出来るだけ早期に手に職を付けて頂き、生計に役立てる目的で和洋裁の学校が設立されました。戦時中は授業に使用する材料の服地等は配給制で入手困難であり、親の服を子供服に作り変えたりするのが当り前で、知人や近所の家庭にも喜んで頂けたものでありました。

戦後は洋裁が大流行し、これが大いに役立つ事になりました。この様な計画が実施された事が史実として知って頂けたらと思い、本文に掲載させて頂きました。

ご遺族の皆様方には先の戦争に於て一家の大黒柱とも頼られる大切な方を失われ、ご家族の悲しみも一入であったと拝察されます。その上戦争中戦後の食糧不足時代を乗り越えて来られましたご努力と勇氣に満腔の敬意と感謝を払いまして貴遺族会七十周年のお祝いの言葉に代えさせて頂きます。



英霊とご遺族に感謝し日本を考える

英霊にこたえる会奈良県本部長

森 岡 正 宏

振り返ればもう四十年も前のことになるが、毎年予算編成時期になると、遺族会の代表が議員会館や自民党本部を回って陳情を繰り返しておられた。戦没者遺族の扶助料などは政治マターであり、決着はいつも最後の大臣折衝となった。年によつては正月を迎える門松を横目に見ながらご遺族の代表が霞ヶ関や永田町周辺を歩いておられた。当時私は奥野誠亮代議士の秘書、代理で何度も日本遺族会の会合に出かけたり陳情を受けたりしていたが、「日本の国のために命を捧げた人の遺族にこの寒いなか、政治家や役人に頭を下げさせるような政治で良いのだろうか？民主主義とはこんなものか？」という疑問を絶えず抱いていた。また、政府の要職にある政治家が靖国神社にお参りするとマスコミがマイクを突き付け「公人として参ったのか、それとも私人としてか。」と聞いてくるのも不愉快でならなかった。国家のために尊い命を捧げた人に敬意を払わないような国は滅んでしまうという思いと共に、総理大臣などが靖国神社に参拝することに對して、外国からとやかく言われることに強い憤りを持ってきた。

議員になってからも、総理の靖国神社参拝に真っ向から反対する中国・韓国に迎合する政治家がいることが残念でならなかった。自民党の代議士会で「日本の法律にはA級戦犯などという言葉はどこにもありませんよ。総理は堂々と靖国神社に参拝し、慰霊の真を捧げるべきだ。」と発言すると、私が当時大臣政務官という立場にあったため、野党や産経新聞以外のメディアにずいぶん叩かれた。中国や韓国は国内事情から日本の総理に圧力をかけてくるのであり、内政干渉の何ものでもない。法務死とされた英霊も含め靖国神社に祭られている全ての御霊にたいし、天皇陛下や総理大臣らが感謝の真を捧げる日本でなければ、存亡の危機が訪れたとき誰が命を懸ける覚悟が出来るだろうか。

私はいま「英霊にこたえる会奈良県本部」の代表を仰せつかっているが、昨年末お亡くなりになった中條高德会長のご生涯を範として、英霊顕彰に努めてゆく覚悟である。

戦後七十年を迎えた今日、アメリカと戦争したことさえ知らない若者が増え、戦争はどんどん風化しつつある。二度と戦争するようなことがあつてはならないが、国同士の戦争のみならず大規模なテロ集団が横行する今日、一国平和主義で済まされるような世界情勢ではない。私たちは日本人に生まれたことを誇りとし、英霊の死やご遺族の苦勞を無駄にしないためにも、この国をしっかりと守っていかねばならない。

